



鑄 重

日本書紀

卷



日本歳時記卷之七

冬

澤書律曆志云冬之終多雨雪始於正月八日

惟小冬之終多雨雪始於正月八日

此云冬之終多雨雪始於正月八日

武州河越藩御書物奉行岡村式郎藏

素問云冬三月此天地閉

地氣上騰地水凝滯

天地閉則聖人閉關

而塞其門以備其氣

溫之謂之閉也

此言冬之時也

此言冬之時也

とわいさすまひりまのわい

平金方にんく冬を元陽の血気伏毒あり人
毛又骨にあり汗とわ湯をと熱をすくらす

月令廣義にんく冬は百火をく衣服とわあまの
事只の暖をほくしてくく大に熱をくれらるす
臥疾瘡瘍熱病とくまふ

東土の書にんく冬は火をくあまの暖あり六別
屈先よ久くしてやめられ血を擦す

金匱要略にんく冬は衣足と伸くゆせらる身暖あり
又雪及七載にんく冬の衣被とまきくわく大に

暖あり睡眠をぬり目とくく氣を吐くは痰毒
とあせも病あり冷物鉄石を枕するはくわく

人をくして眼勝くくむ

月令廣義にんく冬月は門と出りは冬無酒
と飲くを和とあせくく一は毒置をくむく又
可なり元陽といひ物出にんく冬月の毒
多し晨を服くしてこれと和るはくれむく
王肅志衛馬均とくその二人籍とわくし晨に
けもはる一人を病一人を痛一人を急をくま
あつぬぬるは死すものわ後なり病せはれ

已又食之（冬）一（冬）のち（冬）恙を（冬）記（冬）のハ（冬）海（冬）と（冬）の（冬）一
 して（冬）あり（冬）一（冬）と（冬）う（冬）又（冬）後（冬）民（冬）志（冬）の（冬）集（冬）と（冬）大（冬）小（冬）を（冬）記（冬）
 する（冬）と（冬）出（冬）る（冬）一（冬）種（冬）の（冬）一（冬）に（冬）食（冬）は（冬）地（冬）を（冬）守（冬）に（冬）耐（冬）し（冬）
 吾（冬）及（冬）七（冬）載（冬）と（冬）く（冬）大（冬）雪（冬）に（冬）中（冬）洗（冬）足（冬）小（冬）く（冬）先（冬）洗（冬）一（冬）後（冬）に（冬）
 糞（冬）湯（冬）と（冬）く（冬）浸（冬）洗（冬）と（冬）なり（冬）れ（冬）
（冬）糞（冬）湯（冬）あ（冬）く（冬）洗（冬）ひ（冬）或（冬）大（冬）と（冬）あ
（冬）は（冬）八（冬）指（冬）と（冬）な（冬）れ（冬）あ（冬）る（冬）と（冬）なり（冬）け（冬）じ
（冬）ひ（冬）一（冬）湯（冬）あ（冬）く（冬）洗（冬）ひ（冬）
（冬）又（冬）冬（冬）氣（冬）は（冬）何（冬）と（冬）し（冬）海（冬）へ（冬）入（冬）る（冬）其（冬）糞（冬）
 湯（冬）糞（冬）食（冬）と（冬）食（冬）の（冬）次（冬）と（冬）く（冬）一（冬）食（冬）飲（冬）と（冬）く（冬）一（冬）
 金（冬）匿（冬）而（冬）晦（冬）れ（冬）と（冬）く（冬）冬（冬）月（冬）牝（冬）羊（冬）法（冬）食（冬）飲（冬）八（冬）腎（冬）と（冬）食（冬）分（冬）す
（冬）其（冬）中（冬）の（冬）書（冬）小（冬）と（冬）く（冬）冬（冬）月（冬）碱（冬）味（冬）に（冬）食（冬）物（冬）と（冬）く（冬）少（冬）と（冬）書（冬）味（冬）に
 食（冬）物（冬）と（冬）増（冬）一（冬）と（冬）心（冬）氣（冬）と（冬）書（冬）一（冬）

本草に（冬）も（冬）く（冬）冬（冬）月（冬）乃（冬）多（冬）く（冬）葱（冬）と（冬）く（冬）人（冬）を（冬）一（冬）て（冬）病（冬）は
 殺（冬）せ（冬）し（冬）也（冬）

月令度義（冬）と（冬）く（冬）冬（冬）黍（冬）と（冬）食（冬）一（冬）糞（冬）性（冬）に（冬）物（冬）を（冬）ま（冬）る（冬）を
 子（冬）と（冬）治（冬）と（冬）あ（冬）る（冬）と（冬）なり（冬）

冬（冬）の（冬）菜（冬）乃（冬）種（冬）す（冬）一（冬）て（冬）古（冬）庶（冬）人（冬）と（冬）海（冬）あり（冬）何（冬）を（冬）ま（冬）る（冬）功（冬）化（冬）に（冬）
 事（冬）と（冬）く（冬）冬（冬）の（冬）事（冬）を（冬）一（冬）に（冬）種（冬）を（冬）回（冬）古（冬）若（冬）功（冬）作（冬）之（冬）事（冬）法（冬）に（冬）
 冬（冬）月（冬）因（冬）陰（冬）之（冬）陰（冬）也（冬）修（冬）完（冬）之（冬）盧（冬）墻（冬）垣（冬）之（冬）數（冬）考（冬）を（冬）來（冬）菜（冬）計（冬）
 防（冬）是（冬）一（冬）歲（冬）之（冬）事（冬）洗（冬）終（冬）則（冬）復（冬）慮（冬）甚（冬）始（冬）也（冬）呂（冬）氏（冬）曰（冬）洗（冬）成（冬）今（冬）案（冬）之（冬）
 終（冬）又（冬）慮（冬）其（冬）來（冬）之（冬）始（冬）有（冬）禱（冬）之（冬）刑（冬）易（冬）始（冬）而（冬）終（冬）而（冬）始（冬）也（冬）天（冬）地（冬）並（冬）に（冬）
 不（冬）窮（冬）之（冬）道（冬）而（冬）聖（冬）人（冬）體（冬）之（冬）以（冬）贊（冬）化（冬）育（冬）良（冬）始（冬）終（冬）不（冬）相（冬）之（冬）是（冬）也（冬）又

窓より海綿と舟と友人と友と友人を知らず時
 とひくらつくと励ます人―花をさく物静かに年
 人の精細をあつかりてらつらつたの心をくはとたま
 けあまふ詠―河をなれは悔意とくは花を遇ふこ
 徳と用と書紙強―といひその年此後と方とまき
 國法よ之時務農而一時講武と云ふこれハ善を耕―友ハ
 松秋の牧つる有若人深き一た冬をこ―海ありゆふハ
 たり―と云ふと鹿よ富せり―のハは時といふ農人よ
 ち或遠と申―と云ふ久遊乃信よこ農之凌驪威
 中原と信りといふ事―と云ふ

十月

十月 良月 律と徳徳と云ふ 十月の和気と律と云ふ
 乃ちあつたの神出雲代國の山記に云ふ國の神を
 一月といふと略せらるる―奥の秋と云ふせり河林を要極
 ちくを神を月を神を月と云ふ又神月と云ふ神を代國の神
 祭あり神祭これ又神あり神あり―と云ふ今も今も
 乃ちあつたの神出雲代國の山記に云ふ國の神を
 月君下乃法神出雲代國の山記に云ふ國の神を
 律と云ふはけふその神出雲代國の山記に云ふ國の神を
 十月といふと略せらるる―奥の秋と云ふせり河林を要極
 ちくを神を月を神を月と云ふ又神月と云ふ神を代國の神
 祭あり神祭これ又神あり神あり―と云ふ今も今も
 乃ちあつたの神出雲代國の山記に云ふ國の神を
 月君下乃法神出雲代國の山記に云ふ國の神を
 律と云ふはけふその神出雲代國の山記に云ふ國の神を
 十月といふと略せらるる―奥の秋と云ふせり河林を要極
 ちくを神を月を神を月と云ふ又神月と云ふ神を代國の神
 祭あり神祭これ又神あり神あり―と云ふ今も今も
 乃ちあつたの神出雲代國の山記に云ふ國の神を

此日銀と家して念事ありおちやけり也上六
日肉為寮より此言花とまよふありれおつて
こころの言花をまよ子餅乃名あり

まよこころの言花は御時
御記要記より

又まよ乃徳七種の粉と合く徳り七種其粉と
大豆山豆六角豆胡麻豆榎粉ありと書中層より
なりおれ事とちよけり日民記よりまよと徳と
書してらぬい事つらぬまよとまよと徳と
徳とまよのまよの徳とまよとまよと徳と
今年汝汝りく大御記米を師當とまよとまよ
いとまよと御記のまよとまよとまよとまよと

御記のまよとまよとまよと御記のまよとまよと
よりけりまよとまよとまよとまよとまよと
徳り御記御記のまよとまよとまよとまよと
とまよとまよとまよとまよとまよとまよと
十月のまよとまよとまよとまよとまよと
月れ教うとまよとまよとまよとまよと
まよとまよとまよとまよとまよとまよと
徳りまよとまよとまよとまよとまよと
いとまよとまよとまよとまよとまよと
まよとまよとまよとまよとまよとまよと

たくとへへん

○又法 苳蒿とくはひこりやとち 毒根 毒と神み
茶小少あつこちく後まるとわつひ水守片に濁し清り
苳蒿一つんかへ塩と苳蒿かゝゆわくさうりまこま
麹と少のあひ照くに清やとりけまへ〜又たはく
ほき〜後よ湯乃糖よ米糍垢とつらまやたの大根と
あひ〜洗ひ乾らつて清り乾し〜

六月又竈を修繕す下

げ月梅子の結熟せりと取らぬ〜茶〜又を
清りとす但茶よひのりつと用ひあまは梅子と云

又月金廣義よとく十月は梅子の熟すとあひ物
能〜丹毒三月よとく〜なう多のりして灰土とく
やひ茶とつら〜〜次は年梅〜裁ま〜定
け〜とと結と〜〜月よ〜本ら〜
結結書後よとく十月苳蒿のみよた枝と一尺とく
よ〜一日あ〜よた枝とや〜つ〜多〜
至正月よ〜根と〜水邊林下つ〜の地
い〜つら〜つら〜つら〜高年部
花〜つら〜つら〜つら〜
あ〜つら〜つら〜つら〜



秋の山景

五

(10)

下又先祀考妣乃置木之狀一季内とる如新
果ととる也

○冬も乃日精進改火ハ瘟疫と云く後漢書に依
るに又云く一掃と積こハ木と云く火と云く
秋子実り冬も乃日也

天時人幸日お休冬も陽生又春耕機立級流弱
綴吹葭六爻動飛鹿岸君泣臘得斜折天寒樹之
秋放梅雪お不殊郷國長放也且置堂中枱

○冬も乃の後十日房事と云く一と云く海のんえり
は比ハ人乃ハ氣と始くひろ免かていづて也と云く

心く本末を念む根幸と云く一素問に云く冬も不寤
善免瘰癧すく又冬も乃の後十日燔香す今もハ

十五日 孟子の幸也一日あり
崖壁考云孟予高報王二十六年
月十五日卒即今十月十五日

晦日 沐浴

予の國ハ農民は月ハ初代五日四神と云くして
とる也その服と云くもく男女皆すんで飲宴一人
とる事あり乞の比よりまうまうと云く也
賤乃男儀の女をたぐ回れ神とのひく何れ神
と云くしハ事と云く也神神りふは未糖と云く
如く耕也と云く也つひハ神農氏を尊ハ公也

上と花の松葉を煮ててその湯を桶と付合するに
 辰の桐とゆきておれこれとくことと上とを煎ぬれや
 ひたして一冊おし附を煮ると能く煮たてに
 福をいふとくこととひねはきれば六月の比まで梅の桶
 多く煮てくる湯にれいへくおせはまじりぬれぬ
 さら何重の一月までぬれぬ味ゆれぬと云へ
 せぬまじり味なりしと梅の桶と下乃方をせれに上れ柳下
 下海り付合とくこととくこととくこととくこととくこととくこととく
 こととくこととくこととくこととくこととくこととくこととくこととく
 とくこととくこととくこととくこととくこととくこととくこととく
 こととくこととくこととくこととくこととくこととくこととくこととく

又梅餅子金桶へ一書を煮るに
 ○梅餅子金桶は 梅の皮をけぎとてくこととくこととく
 こととく ひらひらとゆれぬ こととく きんぎょのひらひら
はなはなとくるつゆさくあり こととく きんぎょのひらひら
はなはなとくるつゆさくあり こととく きんぎょのひらひら
はなはなとくるつゆさくあり こととく きんぎょのひらひら
はなはなとくるつゆさくあり こととく きんぎょのひらひら
はなはなとくるつゆさくあり こととく きんぎょのひらひら
はなはなとくるつゆさくあり こととく きんぎょのひらひら
はなはなとくるつゆさくあり こととく きんぎょのひらひら
はなはなとくるつゆさくあり こととく きんぎょのひらひら

入薑葱中くむじ一紙敷し一乃付取が一日より控さし
 か志すべし方付よく煮てとけ出さるるを煮出さし
 能く日スリして三日たうすつこま入紙し風吹おま
 ぼりて煮入し一凡抽し一又抽其酢をかみへり作し
 えくせんちもちれしこまくす

○金橘一しの法 金橘の大なりを取替油をしにけり
 ていこまをむけし白や日るなりて煮入入口より
 弊一風ひりさるやうおぬまへし

○大柑蜜の法 大柑を切しこまを煮油をくけりうまぬと
 するはももも一海うまたくも煮入しつたし封じし
 ○控一しの法 控はあつ元とあつこまを煮油を煮
 しぬりへりて貯まへし

八月 葱薹を多くたくくして冬煮る乃用は梅之し一薑と
 一二寸のこしして煮れ方と切きて薑よ入屋中し紙蓋
 去葱よ不火止あつらゆらうつるを煮たかからぬやう
 としこまを煮る物ありし一煮て去るの煮とすうて煮た
 と切くし煮蓋紙とされぬ氣ぬけしつらく免慮とあり
 又八月 葱を薑と入根と多くかりて貯し一煮しつ
 ぬきくを煮し一煮薹はかりするの煮と煮るの初の家
 ののまらつたまげを二月の比りよりかりて煮し取めんと

月令... 久し... 又は月... 又或は... 又或は...

仲冬之月采柳葉...

月令... 月也... 必施力... 陰陽之不定

月令... 益天... 竹...

は月... といれ... 腹背...

本草綱目卷之六

十一月の六候才一踏旦石鳴才二虎如交中三嘉
樵出右大音六二候なり才四地引結才五集
南解才六氷求動七冬心の三候なり

冬心三十七刻二年か夜中十二刻二年か大音と

芒種五刻 凡令度長

日幸以集時記卷之六

日幸以集時記卷之七

十二月

十二月 歳月 徳と大器の十二月乃おえとたふはくは信と
ひん佛名とせむるひある信とよまむ事おほむさうのあふゆを
こいよと徳をうへし舞衣抄のたをん 孝徳曰くはたの六四徳はつる
月よりいふまのつとひのふらふらふとまとまをりて徳をたふし
そは乃國の徳はつるひをこくしつる世徳の十二月の徳をたふし
いふまのつとひのふらふらふとまとまをりて徳をたふし
附会れ記なす

朝日殿乃代ふを建丑月と兼管、せしむる今も
殿の正月元日あり國侯これ日とこ子辨口と云又こ子
乃りらして徳と祭、後上事りて、その時より
すうし、まうやふれ、二年八月事なく朝らと云く
ゆき、まのつとひと徳ふをたふし、

八日ありて一とて臘八と云今日電と云く自派と云す
一集時記又十二月八日経脈脈流電神の事
善又電と云つる事も又一の風俗なり

梅桑庵の風俗也一額項氏子たり祭と云ふ事より
祝歌なり記して云く電神と云く一なり云ふれは
一は一祝歌と電神と云ふ事あり又意事也記又
身は度神皇津姫神は二神也今乃これ云電
神あり一の事ありこれとれら我幽の電神之
○今日水と云く壺と云くに入昨主一牧人なり
解七時水来平治一切疾病製飲合臘八日水

丸神たりとあり

十五日秋也餅漉盤此日多し破邪漏し周禮云五十二
年二月十日有佛涅槃すとあり周礼代より十月迄
衆方より守あり二月八日今此十二月ありと云く今世二月
十日と云く餅漉日と云く守ありと云く

○上旬中旬の申臘月の帝の令多く未と春
祭一と云く正月の用と云く一と云くは冬春未
と云く臘日に来と春と祭と事なりと云く

范正徳西樂府序曰余居石湖終東田の得是書
十更採其法各賦一詩以識因土甚一冬春於臘日

春米為一案計多糶神白臘中畢事春米之土

瓦倉中終年不壞名之春米出年事
又數畧

○十六日此法屋中其煤塵と掃へ一煤塵と掃に
世人多、約白と乞て恒例とす其意とて或風名其後何
其六約白に拘りす其日乃後風名を其後日と用

圖書之簿志を引て願月廿四日毎宗掃塵也

わきハ中毎のそまそまも乞又約白に拘りて

二十日 北の屋のくまのい
布の口と掃 幽俗は月中旬より清乞人九條

少く西へちりい又緯絹をく膝と懸い急帽と忌

かまふるといひておろくの懸置とすいし其り

くまのいといひておろくの懸置とすいし其り

却都乃よまを法事あり

○下旬此内親戚の送物して菓書と契す又三月

下代親家所預り美彦因昔代者も秋力に送て煤

扱と脂之ー或親の膏く思懐のく師傳とあさ

人親身及あ人乃病と療せし醫師をいふと

得くあつと扱とさくー疎落たりく其くも此等

を給くせんり解くせんりううひし決ーかくハ

はくー鄂者なりりくハ元鄂者かれハ世義行れ

す人偏とあつくー因病とめくし事もくす財と



梅系永流言卷七

○は月下の年乃日ぬくしと臍をぬけし
髪と一毛をらしきし一年乃日ぬくし
髪にぬくし焼その灰と薬を今くよき故に

二十七日い比羅と名をすくしは日入りありしとき
まのうの大空の雲の皮を引に焼く他り今日公年
に用ひのまると名をすくし焼くし焼くし焼くし
美にいで久し焼くし世和方なりぬくし薬初
利のハ日教多く歴より名をすくし焼くし
張他大空代肉よ名をすくし焼くし焼くし
ハ薬にやりのあり九怪と名をすくし焼くし
わりの薬よ末より又の可名とありのあり酒氣
阿波の心わしたるい初しは酒よこれ後れ
ゆれるに用ひえくありて酒氣ありし
を薬と用れハ酒ゆりくありて酒氣ありし
にたす必つしとて師よこれより薬と用ひ
薬酒のよく様名と名をすくし焼くし焼くし
まをかくさくし酒代物と名をすくし焼くし
いまうしと名をすくし焼くし焼くし

二十八日 屠癩と合ひ

○醫林集要屠癩方 大黃 山椒 桔梗 肉桂 防風

各五方 川烏頭 白朮 菝葜 各一五 右八味對之 續斷 以

多入 澤白以井中 下掛 應以 既め 元旦 又 取 煎

藥 先 又 酒 又 浸 一 日 煎 一 日 煎 一 日 煎 一 日 煎

以 薑 之 井 也 一 日 煎 一 日 煎 一 日 煎 一 日 煎

石 菝葜 菝葜 之 少 後 末 乃 車 乃 車 乃 車 乃 車

○ 又 方 本 草 綱 目 一 日 煎 一 日 煎 一 日 煎 一 日 煎

防 風 一 兩 菝葜 一 五 分 蜀 椒 桔 枝 各 五 分 烏 頭 二 五 分

赤 小 豆 十 五 粒 二 兩 乃 律 藥 小 丸 之 方 乃 乃 乃 乃

○ 又 方 赤 小 豆 十 五 粒 二 兩 乃 律 藥 小 丸 之 方

大 黃 二 五 分 桔 枝 一 五 分 川 椒 一 五 分 白 朮

○ 本 丸 屠 蘇 方 白 朮 桔 枝 二 兩 防 風 各 一 兩 肉 桂 五 分

大 黃 二 五 分 桔 枝 一 五 分 川 椒 一 五 分 白 朮

○ 白 朮 方 白 朮 桔 枝 細 辛 各 一 兩

○ 渡 嶂 散 方 麻 黃 一 兩 山 椒 細 辛 防 風 桔 枝 乾 薑

白 朮 肉 桂 各 五 分 已 上 三 方 典 藥 頭 無 安 信 濃 方 也

○ 以 日 志 乃 繩 之 他 乃 澤 日 代 用 之 以 之 一 日 煎

晦 日 又 准 日 沐 浴 既 會 俗 多 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

既 會 之 後 土 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

長 親 戚 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

清々暖ます

○屋中及宅中と共く掃潔し、口をたて戸より

酒運種をゆく（酒運種とは酒の種、酒造りに関係するものと思われる）

所へ云々（注釈）

○今夜と除夜との又除夜は、一の年乃おりの昔

其の昔は、一の心と志の心は、後服と志酒合と生祖

乃毒最よそ多し、一の酒合と食、一の少人の飲

ゆ、一の世と事とす、一のあつらふことま、一の歌

ま、一の心と身とま、一の務とことり新と意、一

頃を散記之分来り、一の年乃終るあふれ、一の

あつらふことま、一の又掃潔し、一の今夜乃人のふた

あつらふことま、一のま、一の世の、一の都野終る、一の人の

と志酒合の役を、一の生れ作用と、一の人の

○今夜の床、一の上及寝、一の電、一の香、一の焼、一

溼、一の直、一の助、一の湯、一

所、一の焼と焼、一

一、一

志、一

事、一

花はぐーいーいーい月令廣義のいんまふり

○今年中一歩の月何事と云はれ事と今夕中夜に
焚ハ瘴氣と云く河内縣事あにんまふり又今夕焚
本と多く焚ハ瘴氣と云く連生瘴氣といふあり

○伝ふはぐーいーいーい月令廣義のいんまふり
瘴氣といふは瘴氣
の事あり人伝ふ

○今夕中夜に焚ハ瘴氣と云く河内縣事あにんまふり
又今夕焚ハ瘴氣と云く連生瘴氣といふあり

と云はれ事と今夕中夜に焚ハ瘴氣と云く河内縣事あにんまふり

あふひを瘴鬼乃相約むる故に瘴中まきむりハ

瘴湯寮といふんといふ事と云く河内縣事あにんまふり

ありて瘴氣といふ事と云く河内縣事あにんまふり

かことゆりて由來はいついともなる事あり又取

上人をて瘴殿のこままきく瘴乃引き瘴ハ矢みく

と云く瘴氣といふ事と云く河内縣事あにんまふり

らふりて瘴氣といふ事と云く河内縣事あにんまふり

此は瘴氣といふ事と云く河内縣事あにんまふり

瘴氣といふ事と云く河内縣事あにんまふり

瘴氣といふ事と云く河内縣事あにんまふり

瘴氣といふ事と云く河内縣事あにんまふり

瘴氣といふ事と云く河内縣事あにんまふり

瘴氣といふ事と云く河内縣事あにんまふり

けしと鬼は目くらまらしす 埃囊抄の志は
 俗のも石師の鼻徳なるかたはるに徳乃役とし
 さらば毛也とのりをもくもいはれこれ一やこぬされ
 備む疲とあらふよこをきく教のやうにきこ
 用務礼記海終もこのまよりそれへん後母の
 従徒志よまのこひしすゆめ 結文又選乃張
 衛の東系賦の洋なる又は本赤丸の教とす
 うつこましくさ 法清書乃法よりカケるひぬ教乃
 中の互々のまは今 四倍の星うつもゆまき風よ
 や おにやうひと八鬼をまひとてを教なりは氏物終よあわてを悟るも 雁とやらぬいりさるるなりぬらふとは追とのりさるるなりぬらふとは
あつたりたぬ人のまをこはるは南ありて佛書にこの初めのてい
 こへん一と形を相ありしてはりりまあわわ 作ゆに八倍なる
 と稱なり 法清の聖教とキーとやり 法那の乱を感感なる人
 をろとやふ物方連はされとおひくまありては法清ハ一がなを
 みのさあまひるり 聖教のりうらとをん清をのり一は清を種り人 清を
 吾るは法を而ありはあま清と清とひ法とをわこむ法清ハ一
 又因信を多とりの八鬼をくして編むうら こときや
 たり 披をゆま古人ハ清は法をたえと称する
 晴本行な終拋擲打息休方鬼眼精 行くこれ
 大豆と投く鬼は眼とうらうつまをこまはる 初極
 家カキよまりのつこまへん乃夜の鬼と
 鬼はらこまをむけらこまのまをぬまへん 今まま
 今表つる一のりらた戦と折のまひる一剛鼻と云

檀桑炭用言書七

鬼乃人ともうんこもふとあせく柳をのりて
囊抄に足えわれこれ又あはれに夜もまはる
まらぬにさすくもるにまはるにまらぬにまらぬ
われハ上りの泣きもさすくもるにまらぬにまらぬ
くくの書に柳舟盡終屋津帆戸をのりて
の鬼ともわくまらぬのゆいれにのりて
○屠蘇と今日ハ井の中は海にまらぬにまらぬ
海舟舟の海舟のゆいれ

一杯酒を留跡坐看新年上
明日花餅お餅にまらぬ

又冬通くゆいれ

旅飯多飛鶴を眠空ん何事轉凍氷在柳今昔
思千里秋葉明報又一年

又方秋雁り

更与梅花把一杯
の年事留のを舟一併用

又王裡り

今家と都宛明年四日休
又其氣色穴中以窓紙
王後園梅

古今集の喜道別撰

古今集の喜道別撰
古今集の喜道別撰
古今集の喜道別撰

古今集の喜道別撰
古今集の喜道別撰
古今集の喜道別撰

古今集の喜道別撰
古今集の喜道別撰
古今集の喜道別撰

古今集の喜道別撰
古今集の喜道別撰
古今集の喜道別撰

古今集の喜道別撰
古今集の喜道別撰
古今集の喜道別撰

古今集の喜道別撰
古今集の喜道別撰
古今集の喜道別撰

古今集の喜道別撰
古今集の喜道別撰
古今集の喜道別撰

古今集の喜道別撰
古今集の喜道別撰
古今集の喜道別撰

古今集の喜道別撰
古今集の喜道別撰
古今集の喜道別撰

古今集の喜道別撰
古今集の喜道別撰
古今集の喜道別撰

書よ大離乃時依まらば邪念發する事有り
之為終也 これをも獲代事なるは後の體中の
 則然に一て形所のものみし所ぬこれと念ふと
 こつり方た事やうは元世任代人畫代事念發
 と夢をひ一はれちし中種族能くして且西
 つくぬうたをさうぬくましく花の着るる西
 乃事ありていふ事ありて巫俗の傳へてうた
 死とまぬりてん事と祈り謀る事なること
 ぢやいゆりたんハ言ふ癡人の面おもはるる
 つくぬとらをげよさる事

乃依事終也。其計報布。其あ
 其あ草の夏乃はり考也。

○又と花初と書と禱乃下よ移りありこれ禱
 之れ送終文よ申す事とちとわん人とも出く
 此に源々たる世俗の通患不患バぬたうに
 家不入んうとこいぬひもあうとをもうけ事と
 又あひさ、修んたのくはは處をさう一は
 女子乃たれもれはして丈夫さう人たはさ
 ○世俗よまま代あ花え人あはれはく
 ぶさる世俗愈はたう果乃人後と
 進ん終詞とのぶさるるの
 ぬいす

改嫁少婦多一節あそむる亦多し

これと小婦人女子のたがひをさすなりて大妻の事
二三事ありてありて凡世俗も危くも男女との一
般よりとりて凶害ありしにそむるは
年ありは年ありて人ありは節ありて
子乞て了れ実とまぬき人事をしむ俗巫乃
ともかくとれと事として民乃社をつむるを
事としてゆたされとこげ事一か舞入書り一忍
日卒の四化子をちるふとむいひしそりい海法か
ア一也世間経よ大に凡年安んぬ事一也

上は凡年と六七歳より九歳と加え六十一歳より
まくとより七歳十歳二十歳二十歳二十歳二十
三歳止中二歳止中一歳なり九歳と加ふり九
老湯代敷なり湯極れいなり凡世の凡世の
俗より凡世よりまくれともひ年毒事ともいふが
まといふハ俗の年を毒事とせよとあるは
教とともなふし凡世の事ともいふは
俗ハ世を五祥より凡世の俗とけり
教ととも一画とさげハ世の俗とけり
一、凡世の俗とけり一、凡世の俗とけり

或類人ひさりに物ひさせるこゝろとよき人
 乃新山御縁より天命をまはす何れこそよき人
 とまぬりまふやよき危年とよき子に御座候事
 かもたすつひに御座候事とよきことよきこと
 まろしとよきを乃後中との成世日と臘日と号し
 いはれとまつり又古に聖賢民有功の人のまつり
 あり一、澤山の儀よりえたり又玉船之典と臘の先
 祀とまつり時を百神とまふ同様にてまつりたり
 小室大室二の十日八日百今世経よりまの事、持すは
 乃よ食地甚物とまふとまふこといふおれ性よりまの事、持すは
 凡の之、換世の世の時考すもの抱りよ記す。

○糶あたら糶あたらと製する法、母糶あたらと室代年のあひ二七日

香豆日浸して取わけ皮と去りし、干野へ

○茶あやとくら之野へ一、茶法、出山より、リ、たり

年久しと茶あやとまふし、細あや力して皮と去切へ

て米粉とあひひくけ、まよつぬ、茶あやと茶あやと

○糶あたら米と糶あたら米と茶あたら米と茶あたら米と法、一日あ、又浸し

一日の乾すぬ、ひとろり、茶あたら許、久しく浸せ、米氣

ぬき、とあ、糶あたら米の茶あたら米と、糶あたら米の茶あたら米

と、糶あたら米とて病人よ用れ、治癒あたらとまふ腸胃あたらと

てん脈よりすまは

○投末と乾餾よりする法 投末と多く臘水より一日
 後、蠶矢に多く曝乾去く糞を入於壘、一用
 する時、壘湯入法、口の速く飲たけり、糞を中、一之胸腹
 不塞、甚かきあり、糞入り、口の速く包てこれと沸湯に
 投す、之、匂く、飲とけり、毛眼用、送也、法、平石、或は
 ○糞糸代粉と多飛よりする法 上の代糞糸と多飛、
 一、臘月の水、湯、一、毎日、多と、廿二、三日、色、黒く、石
 臼とよく洗ひて、石臼末と磨き、一、多と、よく、え、て、も、め
 いと、よく、磨き、一、海と、の、海、い、石、臼、も、よく、磨き、一、え、て、又、よく、す
 わさ、代、桶、入、え、と、加、之、一、枚、豆、と、湯、多、と、去、り、く、は、く
 毎日、水、と、換、く、水、花、より、す、二、日、三、日、と、す、と、る、後、綿、布
 の、糸、糸、よ、た、代、粉、と、入、り、て、あ、と、去、り、た、ま、ま、こ、も、と、く
 水、と、一、す、す、但、之、後、は、多、く、糞、小、入、り、す、す、え、る、凡、の
 む、去、り、す、一、又、袋、か、く、も、あ、く、つ、く、去、り、す、一、あ
 去、り、て、袋、より、お、り、お、り、一、お、り、く、い、て、日、の、布、も、乾、く、ら
 時、又、こ、の、お、り、に、お、り、て、臘、平、よ、と、る、あ、り、よ、く、乾、く、一、壘
 小、入、り、す、ら、し、て、氣、の、調、り、を、く、は、す、一、一、周、ら、何、ゆ、り
 くと、よく、解、す、一、壘、湯、多、投、り、て、後、お、水、と、湯、して
 食、い、も、ま、ま、留、け、け、く、再、煮、て、食、い、一、又、赤、豆、の、煮、き

博桑林集巻七

〇十五

くたはるゝとくしゝるゝ食の甚美あり性燥世病を
らゝめ脾胃と腸と毒をけりて再考て用へし世病
食氣滞ありあり用へし

○赤小豆と多煮て置るは 赤小豆と煮て中へ煮ると
とらゝるゝた袋をよ入こゝて煮たり治すべし物重く
年と行久しして中へ用ては接せし 異月一應解の
包よ用てしと煮るは即時よ用わされと煮す

○暖水とく糖と煮り大に切て二三々切て湯水
よつれ又二三日ひりて二三日よ上よ治る米粉と削
きく又臘あんに八五一一煮る時よか熱湯よ入

糞字に肉をく通るや湯の中に煮く五割一箱
煮と次煮久しし煮て煎せし 熱湯に漬して米
豆粉と衣しし用ひ好くく煮く糖和し氣
と石塞恙久ししとく西月中ハ二三万よ一皮水
を擽へし二月より毎日あつとゆかへしよつとる
米粉と去されぬ換へ奥ありし

○臘あつて赤小豆と煮る久しし煮て接せし凡
赤小豆と煮る久しし煮る水と煮る水と煮る水と入
物食のち後しし以て煮る久しし煮る久しし煮る久しし
のこえ次煮るよた煮るよと能く煮る久しし煮る久しし

八浅らりるひびり乃とちひひ夕合をまてとけの
 能に之變してありそ何又ゆ出とたあてて
 ぬ出ー白あくよく清くたれはあくと飲り明初
 まていして一用一勢のあの上るるまてい
 如世これ一勢と功とと多く不費ーと能熟一
 豆け不測して世今く味美なり又更と冬
 くだらよく變せしめんときれい大豆だけぬを
 てうすれなるもまの味前ー
 二三平一粒々、
 考れに味格也

○白米の若乃製法 大豆を石ばと去ゆは
 蒸し製して上白乃米麴を石五斗或石八斗三年
 合くよくくうとつこ梅はゆ並に平日とる也て

月四味極く甘く色白ー
 ○五斗米の若と製する法 大豆一斗麴一斗酒糟一斗
 米糠一斗塩一斗石一斗つこ合するなりぬうのりて

一い未習性極く暖中につくも次意人よりて
 魚肉をくくと煮くはゆよりー
 ○ぬうとそと製する法 米のぬうとあててぬくぬ

瓶みて能ひして製したる何火とたさまも
 垂聖のふつとく何有かぬう一石一塩一斗米

種桑炭原記巻七

并湯池のうごと入白みく結つるませぬけ湯氣
乃強うちとさるし桶少くも瓶とてはさうと
ましく至来年正月より又白くつらさの
きく入まへ

○又法ぬくと多のくかくこ〇大さお片堂の用
に海草やまぬしあ桶とて瓶にくも入至十
又日研とてかくしあは白くかり白くくく
くまくと増とてく白くはる合せた桶と
て毛瓶にくもきく入しはまきり増のあてよ
くまのくし左れははくくくくくくくくくく
臭が良法あり桶中の氣清く合器くくくく
病人に用へ

○厚鬼と増滝のう法 厚鬼等れ毛とぬきまて
腸と去洗つる毛校せぬしけし増とてく入
又甲も毛薄竹少く増と多くく入又加み増と
くけ足とつらまてくは合せさうまのけはて
一板とけの増ゆまをかありも厚紙よつらまて
苞よつらまけくさけまへし張るに増滝のくく
○増滝の法 海鏡と結ぶさう増と多くはき
桶よ入さうのくくくくくくくくくくく

合せ一液くさひりくして鉄管一とくまきり
又鷹の包てまきりりまきりいばたをたひくひり
こまの包縄あくくくきつてくかひけて一日のま
よまよ赤ひりして塩た結約する時つゝまきり
下一或赤土の塩ていまきり

○魚を撈漬乃法 魚をよ塩と分く中らつと

一日一夜至 類は漬る云云おやと塩は漬至 下はよく漬るは撈一り その後取出一

あひく塩と法去紙とくくあ氣とぬくひ撈一塩
かへよたぐひまんの塩と用ひるをるの塩かゝる
あひ後一して塩と出りさく魚をと撈は漬くのち

よのよとあまきり一撈りよとあまきりよのよ
あまのの繩をきりよとあまきりよのよ
あまの風引んやぐ撈は撈せされい魚をと撈せり
そ物と二つを用てまきりよとあまきりよのよ
塩あまの如くやうくけいよのよ

○雑辨等れ塩引よの法 大よ切さり骨と去酒よ
浸さるまきりよのよ なまの酒ぬき平介 下は
あまの此屋下よつりさけまきりよのよ 或はよくこの
よとこもつりよのよ ゆき浸せは撈あはぬひ出らん
○乾大根よの法 ゆき初日蒸すのはと撈り

根乃末よ各小繩乃海乃穴とわけ小繩よ焚く
 風ぬれおとさくつ次日おゆけよて大定の
 終りて九月三日のまよきよしり 三喜代日たて
 ぬけおてぬれおゆけよて大定の
 おつおとさくつて風味甚佳

○胡蘿蔔乃つけ物と製法一は胡蘿蔔の
 大たりのを煮くそ他は三日日ふち一先ぬくそそ
 一きそ他は煮くそ他は三日日ふち一先ぬくそそ
 一きそ他は煮くそ他は三日日ふち一先ぬくそそ
 一きそ他は煮くそ他は三日日ふち一先ぬくそそ
 一きそ他は煮くそ他は三日日ふち一先ぬくそそ

人乃世實より事の中の中と想う人何んてと
 根すれり口香とたらく候はし人何んてと
 口切りて縁月たあけりえりつりてあふれし
 湯と煮る候はし毒ありかたしつりてあふれし
 うせぬ毒あり又おれ一九月と泡きりてあふれし
 乃能くあけし中とあけしつりてあふれし
 入へしめけせされし毒とす

寒中の雪氷と貯ま一雪んぬ敷乃積葉積葉と
 ぬれおゆけよ入る年をりおの指申はる
 ぬれおゆけよ入る年をりおの指申はる
 ぬれおゆけよ入る年をりおの指申はる

能一切の瘧疾及瘧疾癩癩等これ瘧毒疥癬時疫と
 治し日疾といやこれといく酒と他方病と他れ入時
 取美ひて久の瘧氣とひて瘧疾と浸せしる月を換
 せ又又又果た蔬乃種子と浸せしる多くと
 取とせしる血日のといく毎て六者の瘧疫時病
 と治す月令瘧疾のいふいとく瘧疾中く受
 食類とのりれ煮くも油御酢をいれ煮るとすれは石炭
 麻房と志めぬる香油と焼く並しきいれ瘧疾不入膏
 葉に用て作効有り婦人の口にはぬれぬ瘧疾と光りて
 其生もす多く瘧疾の癩癩の用也のいふ飲食類は
 これと用く功他油一倍は又臘月の瘧疾と
 卵へ膏月菜をも合すしし月令瘧疾のいふいとく
 乙水切換散をいとく十月より西月までのいふいとく
 丁のいれ桂よくあく糞生也の瘧疾も中といふいとく
 柳の枝と切て煮去れおり油の瘧疾と治すして瘧疾と生を
 以月忍冬煮と納すしとれと西月書片くと瘧疾
 へのいれ瘧疾と病す

冬月甚寒して瘧疾の者あるとく身冷して瘧疾一
 疾冬月あはれ瘧疾と瘧疾とらりり何は股すくと瘧疾大
 微氣をいれ瘧疾と瘧疾と股すくと瘧疾

方の衣とさつとこれとつとあつとあつと米と飯費一と袋
 に入んとつと磨りて一と米ひゆきハ又他の袋よ飯費一
 たり米とへく磨りて一と或火とたきり竈のくハ飯費一
 と用んまう一とつりて一と湯よまう一と用ん同く
 後衣薑湯温酒熱きとちへて併せて一と定まると
 と温す一と火とつとあつと冷熱と火氣とまう
 必要す又雄黄煇硝等分と用て末と海眼茶の熱は
 熱物志よとく十一月甲子の日と食つてはまうこれの
 類より一月令度煮よとく精は忘れ生椒と食つと
 忌まうの燐より果菜と食つてはまうと多食つては凡
 物代筋骨と食つてはまうは書によとく熱と
 まうつとまうと害す牛固と食つてはまうは
 つと食つと食つとつと神氣と持す蚌蝦乃類と食
 事かたれまうハ酸よとくは月のく平政と食つ
 他月これと食つては病とあす

損軒乃後よ新煮の中はと正月の食物禁を
 その多しある某月某物と食つては病とまう
 けふは法湯家の物志と夜つと一併よまう
 記さす記さすおきとつとつと古れ方書にまう
 さるお依家本草にまうと裁つとつとつとつと

作すべし候^ハ之り^ハ多^クれ^ト今^ノ日^ニ書^キ上^ル雜書^ハ此^ノ致^ニ
た^トそ^ノ中^ニ載^セて人^ノ被^レ罵^リて候^ニ此^ノ可^ク受^テル^ニ
人^ノ此^ノ擇^ク之^レと^モ被^レ罵^リと^モ有^ル也^トの^ミ

十二月八日^ハ此^ノ候^ニ一^ツ湯^ノ小^ノ郷^ニ才^ニ二^ツ懸^ル如^ク巢^ノ才^ニ三^ツ難^ク此^ノ難^ク大^ニ

少^ク多^ク此^ノ候^ニあり^ト才^ニ返^リ難^ク如^ク乳^ノ才^ニ五^ツ在^ル多^ク屬^ス疾^ノ才^ニ六^ツ

氷^ノ澤^ノ腹^ノ堅^ク大^ニ多^ク此^ノ候^ニあり^ト
大^ニ一年^ト十二月^ノより^テ七^ノ年^ノ候^ニあり^ト二十^ノ二^ノ年^ノ

十二月^ノ月^ノ令^ノ及^リ昌^ノ氏^ノ年^ノ令^ノ候^ニ
惟^ニ南^ノの^ミ年^ノより^テ一^ツ、

十二月^ノ屋^ノ我^ノハ^ニ別^ノ敷^ノ少^ク多^ク六^ノ台^ノ少^ク多^ク及^リ別^ノ大^ニ多^クハ^ニ与^テ大^ニ

是^レ一^ツ反^ノ延^ス之^レ月^ノ令^ノ度^ノ書^キ

日本家譜記卷之七

都鄙祭事記

正月

- 元旦 夢中御所會 ○二日 在名本村吉松嶺子 ○四日 花多井坂遊藝振 ○七日 夢中御所會 ○十日 笠面山系 才天系 茶摘川祓事 ○八月 十日より以後七日御祭法 ○十日 西之文夷系 ○十三日 南郷之屋會 ○十四日 柳上御所之河内子氏祓事 ○十五日 其後爆竹 噺家秋 也子秋 河内國平之屋津粥 後名園坊五松嶺子 ○十六日 夢中御所之屋 福林寺大放花 噺家岡魔堂念仏 ○十七日 俗人祓事 吉野厄丁 ○十八日 夢中爆竹 ○十九日

八幡夜弥奈 廿五日と法成寺 ○廿三日 志保寺の寺
務也并能 ○初宣 轉るま

二月

朔日 七日と初宣 志保寺同中宮と二月堂新 ○四日
初年寺 ○七日 十宮と南教新の能 ○九日 十宮と
中野寺也並まき寺の能 ○十日 小山麻花寺也 ○十日
涅槃寺 暖藏大徳社 志保酒造寺也 ○十六日 狭路
○廿日 廣石寺 ○廿二日 天宮寺 伶人屋 ○廿五日 送雨
寺也 中野天祿寺 ○廿六日 志保寺 志保寺
初初 大寺堂也 ○初年 福壽 志保寺 志保寺
法也 和泉國水乃与初十と ○上中 春日寺 ○彼春

三月

三日 雙中關籠 飯後初年 石心寺 聖津寺 土佐
初年 初年 ○又日 一寺寺也 龍馬寺也 ○六日 一寺寺
能也 今日より十八日と暖藏大寺併 ○八日 泉涌寺 志保
忌 ○九日 水尾寺 泉涌寺 志保寺の能 ○十日 今日
安樂花 ○十一日 志保寺式村花見 ○十二日 今日より
日と天宮経経津 日在八馬の 今日より十日と志保寺大所
志保寺 志保寺 ○十四日 志保寺併 志保寺 ○十五日 志保寺
志保寺併 志保寺 ○十八日 志保寺併

二十九日 堪哉新也身拭 ○廿日 東寺仁心弘法親王
 之御女侍 ○中午の年午 初午の年午 掃部西園寺 中午
 之御御 之御御 之御御 石段水邊付也

巳月

朔日 以列苑麻也 ○二日 三日 南都の在の能 ○四日
 廣徳也 施田也 ○八日 灌佛 二門戒壇堂に在能 ○
 九日 法多也 之也 ○十四日 南都の法事 ○十五日 之
 井寺 之園也 之也 ○十七日 紀州和歌山 之也 御堂
 日之山 東照也 之也 尾列名古也 之也 ○廿日 勢
 田也 之也 ○廿一日 之也 之也 ○上卯 之也 之也

○乙辰 之也 ○上巳 之也 以列之也 同堅固也
 ○初申 之也 之也 ○初酉 之也 之也 ○初亥 之也
 ○中子 之也 之也 ○中卯 之也 之也 ○中辰 之也 之也
 ○中巳 之也 之也 ○中午 之也 之也 以列之也 之也 ○中
 申 之也 之也 ○中酉 之也 之也 ○中戌 之也 之也
 之也 之也 之也 之也 之也 之也 之也 之也 之也 之也
 之也 之也 之也 之也 之也 之也 之也 之也 之也 之也

五月

朔日 實友也 之也 之也 之也 ○六日 之也 之也
 之也 之也 之也 之也 ○七日 之也 之也 之也 ○八日

予活集〇十三日 懐州宮内御所〇十六日 今之集〇廿日
多作集〇廿三日 坂本友社集〇廿八日 佐吉河田之
〇晦日 祇堂河野使

七月

朔日 廿一と富吉法〇二日 高橋の虫掛 廿八〇又日
祇園會法〇七日 祇園會 今日より十四日と祇堂
御蔭集〇十四日 祇堂會 尾川法堂集 竹生集〇
後後朝天子集〇十六日 尾川法堂集 以戸公集〇一
流系集〇祇堂會 他集 志小舎祇堂會〇十六日
今日より伊勢集〇十七日 相國言集 志小舎

〇十八日 祇堂河野使 十九日 河野集
納経 廿一日 廿二日 松尾集 廿三日 能之集
〇廿四日 尾川法堂集 〇廿五日 佐吉の虫掛
三吉虫掛 大坂天宮法 楊之集 〇晦日 又之集
後河野法 尾川法堂集 〇初日 又之集 〇二日 又之集

七月

朔日 又之集 〇六日 少野集 〇七日 少野集
壇煤拂 車系虫掛 并此集 〇八日 又之集
〇九日 又之集 〇十日 又之集

○十二月十九日三夜中夜に建徳院○十四日 禁市院焼○十
五日ハ 恒安院の取 三軒と女坊 其築施徳鬼 今ノ日
イハ 明日と云ふ所ハ石動子日 十七日と云ふ所ハ 浦ノ邊焼
院○十六日 大ノ名 松ノ邊 焼院ノ子 焼院ノ子
取ノ火 松ノ邊 焼院ノ子 取ノ火 松ノ邊 焼院ノ子
勢別 院ノ子 松ノ邊 焼院ノ子 取ノ火 松ノ邊 焼院ノ子
多ノ院ノ子 松ノ邊 焼院ノ子 取ノ火 松ノ邊 焼院ノ子

八月

朔日 禁市ノ ち方ノ 院ノ子 松ノ邊 焼院ノ子
村松抄し○二日 堺天院ノ子 ○三日 少院天院ノ子

教院親正ノ子 ○四日 別ノ院ノ子 ○五日 別ノ院ノ子
院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子
院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子
院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子
院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子
院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子

九月

院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子
院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子
院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子
院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子
院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子 院ノ子

大津宮修多事 五條天神事 新田の事 依也の事
 ○十一日 伊勢守幣 出陣 吉田の伊勢守被命 ○十二日
 左奉事 ○十三日 白川事 ○十五日 志念事 栗田口事 江津御所
 御所三年上之修能事 河内事 左奉事 志前少念事 ○十六日 志
 山事 志事 志事 ○十七日 持別池田事 服漢事 ○十八日 志
 志事 志事 竹田事 建仁寺門事 志事 志事 志事
 の既 ○十九日 大板丹摩事 志事 ○廿一日 志事 ○廿二日 志事
 本願事 志事 志事 志事 ○廿五日 志事 志事 志事
 田事 ○廿六日 志事 ○廿七日 持別池田事 ○廿八日 志事 志事
 志事 ○廿九年 志事 ○廿九年 志事 志事 志事

十月

又日 志事 志事 志事 志事 志事 志事 志事 志事
 寺法事 ○十日 志事 志事 志事 志事 志事 志事 志事
 志事 志事 志事 志事 志事 志事 志事 志事
 志事 ○十六日 志事 志事 志事 ○十七日 志事 志事 志事
 志事 志事 志事 志事 志事 志事 志事 志事

十一月

八日 志事 志事 志事 志事 ○十一日 志事 志事 ○廿一日 志事 志事
 志事 志事 志事 志事 ○廿二日 志事 志事 ○廿三日 志事 志事
 志事 志事 ○廿四日 志事 志事 ○廿五日 志事 志事
 志事 志事 ○廿六日 志事 志事 ○廿七日 志事 志事
 志事 志事 ○廿八日 志事 志事 ○廿九日 志事 志事

十二月

十五日ハ城塞居改○廿二日大徳寺再考志の十九日廿九日
松尾山佛名經の晦日 祇園寺よりけり 寺よりふんむり
乃律のり 寺のふんむり 寺のふんむり 寺のふんむり

けり 寺のふんむり 寺のふんむり 寺のふんむり 寺のふんむり
寺のふんむり 寺のふんむり 寺のふんむり 寺のふんむり
寺のふんむり 寺のふんむり 寺のふんむり 寺のふんむり

京都寺町通佛光寺

昔貞享五年戊辰三月上澣雒陽書海日新堂壽梓

書

林

京都寺町通佛光寺	河内屋藤四郎
江戸日本橋通壹丁目	須原屋茂兵衛
同 貳丁目	山城屋佐兵衛
同 貳丁目	須原屋新兵衛
同 南傳馬町壹丁目	山城屋政吉
同 下谷御成道	英藏
同 大傳馬町貳丁目	丁子屋平兵衛
同 芝神明前	岡田屋嘉七
同 司	和泉屋吉兵衛
大阪心齋橋筋本町通	河内屋藤兵衛
大阪心齋橋筋南傳馬町通	河内屋茂兵衛

